

# 使徒パウロの勧め

——ガラテヤ書 5 章 25 節をめぐって——

## ルスターホルツ アンドレアス

### 1 はじめに — この人を見よ

ニーチェの著書『この人を見よ (Ecce homo<sup>(1)</sup>)』の序言には、「いつまでもただ弟子でいるのは、師に報いる道ではない<sup>(2)</sup>」と書いてある。弟子は教師のもとで教わったことに基づいて独創的な考えを持つようになるところで、初めて教師が教師としての使命を果たしたことになる。ニーチェは考え、こう書いたのだろう。この転換は、教師にとってなによりの喜びである。なぜなら、この転換が起これば、教師は次の世代の教師をこの世へと送り出したことになるからである。

周知のように、イエスを主として信じて生きようとするパウロという学徒を指導し、立派な教師としてこの世へと送り出したのだと自慢できる人、即ちパウロの教師と名乗る人の有無は確認できないのである。パウロ自身は、「わたしはこの福音<sup>(3)</sup>を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされたのです」(ガラ 1:12) と主張し、福音を巡る理

---

(1) ヨハネによる福音書 19 章 5 節を参照。

(2) F. ニーチェ『この人を見よ』(手塚富雄訳)、岩波文庫、1969 年、13 頁。この言葉は『ツァラトウストラ』からの引用である(第一部の『贈与する徳について』を参照)。ニーチェはさらに弟子を批判し、「なぜ君たちはわたしの花冠をむしり取るうとしないのか」(13 頁)と言い、反論を呼び起こそうとしている。

(3) それは「パウロがガラテアの教会に伝えた律法なき福音のことである」、山内眞『ガラテア人への手紙』日本キリスト教団出版局、2002 年、75 頁。

解に関して、自分がある人から指導を受けたことを断固として否認するとともに、自分は正当な使徒だと断言するのである（ガラ 1:1）。ところが、パウロも原始キリスト教の伝承を受け継ぎ、その伝承を尊重したので（1 コリ 15:3 を参照<sup>(4)</sup>）、上述の言葉を通して、自分自身が告げ知らせることが正当で、根拠のある教えであるということをガラテヤ人に対して強調しようとしたのだと思われる。

ところで、この啓示は具体的にどのような出来事や経験だったかは明らかではない。紀元後三世紀初めの『偽クレメンスの説教(Pseudo-Clementine Homilies)』の中で、パウロはほんの少しだけイエスに教えられたことを前提にする箇所がある<sup>(5)</sup>。パウロのこの短い啓示に比べて、イエスとペテロとの関係の方がもっと長いので、パウロの主張は頼りにならないとしているのである。

しかし、ダマスコへ行く途中に起こった出来事（ガラ 1:15～16；使 9:1～9 を参照）によってパウロの考え方や信仰は一変したので、彼の上述の主張は次のようにも解釈できるだろう。人から教わることによっても得られない知恵や知識などがあり、語り継げようとしても、そのことがきちんと受け止められないこともあるということである。特に信仰はこれに当て嵌まるだろう。それらの受容は、努力の結果でもあるかも知れないが、賜物、つまり、自分に与えられたものを受け取ったと解釈した方が相応しいのではなかろうか。たとえばルターにとって、神の義についての難解な箇所（ロマ 1:17）を巡る認識はそういう経験であったに違いない。論理的に説明できることではないので、*sola gratia*（恩寵のみ）によって得られたものだという他なかったのではないか。

ここで、ニーチェの思想について議論するつもりはないが、前述の本の副題についても少し注意を促しておきたい。副題は、『ひとはいかにして本来のお

(4) さらに、U. Schnelle, *Paulus: Leben und Denken* 『パウロ：生涯と思想』, Berlin, New York: de Gruyter 2003, 148 頁を参照。

(5) Ps. Clem. Hom. XVII, 19, 1-4: *Die Pseudoklementinen I, Homilien*, J. Irmischer u. F. Paschke, (GCS 42), Berlin: Akademie-Verlag 1969, 239～240 頁を参照。特に, *εἰ δὲ ὑπ' ἐκείνου μῶς ὥρας [一時間] ὀφθεῖς καὶ μαθητευθεῖς ἀπόστολος ἐγένου...* (240 頁)。

のれになるか』<sup>(6)</sup>である。前述の言葉は弟子と師との関係について述べられたものであるが、この副題は個人としてのあり方についての言葉である。理想と見なされているのは、何らかの方法で本来のおのれになることである。この過程について、ニーチェはこう考えている。「ひとが本来のおのれになるということには、その前提として、そのひとが本来のおのれをいささかも予感していないということがなければならない<sup>(7)</sup>」。つまり、予感しないにもかかわらず、人は迷いながらも<sup>(8)</sup>本来のおのれになり得るということである。

さて、「先祖からの伝承を守るのに人一倍熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの者よりもユダヤ教に徹しようとしていた」(ガラ 1:14) パウロは、自分自身がどうなるかをいささかも予感していなかったであろう。彼は然るべき生き方や考え方などに疑念を抱いたわけではなく、異端だと見なしたキリスト教徒の迫害に励んだ者であった。しかし、前述したように、ダマスコへ向かう時の経験がパウロの人生を一変させ、彼は全く予感していなかった福音を告げ知らせる者になったのである。従ってパウロにとってはすべてが、神の啓示のおかげとしか言う他なかったようである(ガラ 1:15~16を参照)。ここで、パウロが使用している教師<sup>(9)</sup>の有無や役割についてではなく、神の賜物である霊(信仰)とキリスト教徒の行動を視野に入れ、両方が結びつくと思なされるガラテヤ書5章25節(εἰ ζῶμεν πνεύματι, πνεύματι καὶ στοιχῶμεν<sup>(10)</sup>)を考察しながら、パウロはどういうことを勧めようとしたのかを明らかにしたい。

## 2 この解釈を見よ

新約聖書翻訳委員会が2004年に註解付きの日本語訳聖書を出版した。ガラ

(6) ニーチェ, 上掲書, 5頁(原文: “Wie man wird, was man ist”).

(7) 同上書, 67頁。

(8) 同上書, 67頁参照。

(9) ガラ 6:6の「教えてくれる人(=教師)」に関する箇所は異なる事情を扱っている。

(10) この箇所の日本語訳は以下を参照。ζῶμεν: 直説法, 現在形, 能動相, 複数, 1人称; στοιχῶμεν: 接続法, 現在形, 能動相, 複数, 1人称。

テヤ書 5 章 25 節に下記の註が付されている。

「ここには、パウロにおける『直説法』と『命令法』の間の弁証法的統一の関係が典型的に見られる。なぜならば、通常の論理に従えば、すでに『霊によって生きている』のならば、もはや『霊によってまた歩もうではないか』との勧告は余計なものだからである。」<sup>(11)</sup>

通常の論理に従えば、それは「余計な勧告」で、本当はなくてもいいということのようである。この判断の前提は、25 節の前半（条件文の前提）と後半（条件文の帰結）は同じ内容のものであるが、表現形式（直説法あるいは接続法）だけが違うという考えである。さらに、これはいわゆる通常の論理ではなく、パウロの弁証法的統一の関係であるということである。残念ながら、この余計な勧告の適切な理解についての説明はない。表現形式の変更に関して異議はないのだが、果たして前半と後半は内容的に同意義であろうか。25 節が行動について語っているのであれば、確かに余計<sup>(12)</sup>だが、前半はキリスト教徒のおかれている状況を表し、後半は然るべき行動や態度について述べているのであるなら、この言葉は、決して通常の論理に調和しないことはなく、「逆説的な指示」<sup>(13)</sup>でもないのである。

ガラテヤ書 5 章 25 節の急所は前・後半にある与格の *πνεύματι*（霊によって）と後半の動詞の *στοιχέω*（従う）である。これはどういう行動を語ろうとしているのだろうか。まず、問題点を明確にするために、この節の幾つかの日本語訳を比べてみよう。

「若われら<sup>もし</sup>霊<sup>みたま</sup>に由て生<sup>より</sup>なば亦<sup>いき</sup>霊<sup>またみたま</sup>に由て行<sup>より</sup>むべし<sup>あゆ</sup>」

加拉太書註釋（1901 年）<sup>(14)</sup>

「もし我ら<sup>われ</sup>御霊<sup>みたま</sup>に由りて生<sup>よ</sup>きなば、御霊<sup>みたま</sup>に由りて歩<sup>よ</sup>むべし<sup>あゆ</sup>。」

(11) 『新約聖書』新約聖書翻訳委員会訳、岩波書店、2004 年、603 頁。

(12) 果たして「余計な勧告」のようなものがあるのだろうか。むしろそれは話者の心配を表し、語用論的な問題として扱う必要があるのではなかろうか。

(13) 朴憲郁『パウロの生涯と神学』教文館、2003 年、231 頁。

(14) エル・ビー・チャモレー『加拉太書註釋：全』聖公會出版會社、1901 年、160 頁。

文語訳聖書・大正訳 (1917年)<sup>(15)</sup>

「わたしたちは霊の指揮下に生きているのであるから、霊の指揮下に歩みましょう。」  
佐竹明訳 (1974年)<sup>(16)</sup>

「わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。」  
新共同訳 (1987年)<sup>(17)</sup>

「わたしたちは霊によって生きているのであるから、霊によって歩もう。」  
山内眞訳 (2002年)<sup>(18)</sup>

「もし、私たちが霊によって〔今、現実に〕生きているのなら、霊によってまた歩もうではないか。」  
新約聖書翻訳委員会訳 (2004年)<sup>(19)</sup>

以上の日本語訳は、ギリシア語の条件文の解釈をめぐるもう一つの問題を示唆する。というのは、この箇所の前提節は条件なのか、それとも、理由付けなのかということである。佐竹氏も山内氏も前提節を「～から」というように訳し、理由付けだと解釈するようである。しかし、この「から」は主節と従属節における事実確認（確定の順接）を表すので、主節は事実確認に伴う要請、つまり事実から自然に生じる要請だということではないかと思う。パウロはただ事実を断言したという解釈は可能であるが、両氏の解釈は事実の確認を相手に委ねる解釈を不可能にするので、条件文をそのまま訳した方がよいのではないか。主節と従属節にある事態間の因果関係はそれでも十分明らかだろう。この条件文はただの修辭疑問文ではなく、パウロの一方的な主張でもなく、現状、即ち自分が生きている基盤についての確認を相手に委ねる文であろう。

主節と従属節にある与格の *πνεύματι* は、それぞれの訳において、まるでこの節の伝える行動が全く同様にこの霊に係わるかのように、同じ表現で訳されたのである<sup>(20)</sup>。定冠詞が使われていないのは重要なことだと付け加えておき

(15) 『舊新約聖書』日本聖書協会，1950年。

(16) 佐竹明『ガラテア人への手紙』（現代新約注解全書），新教出版社，1974年，544頁。

(17) 『聖書：新共同訳』共同訳聖書実行委員会訳，日本聖書協会，1987年。

(18) 山内眞，上掲書，341頁。

(19) 『新約聖書』新約聖書翻訳委員会訳，岩波書店，2004年，602頁。

たい。様々な訳や註解書を見れば、明らかだが、これは 25 節のこれらの動詞が同じ行動を表わすという解釈に基づいてそうなったのであろう。すでに ThWNT において<sup>(21)</sup>、25 節の動詞は同義語ではないということが指摘されたにも拘らず、議論が続いている。特に議論されているのは、従属節の「生きる (ζῶμεν)」ではなく、主節の「従う (στοιχῶμεν)」という動詞である。この「従う」という行動が自然に、かつ“霊によって”行われていることではないとパウロは考えているので、そうすることを促しているであろう。だから、それらは全く同じ意味であるはずがない。従属節の「生きる」そのものは、パウロにとって、各自が確認できる事情なので<sup>(22)</sup>、問題ではなく、次のように訳せられる。「もし、私たちが霊に生かされているのなら、. . .」(ガラ 5:25 前半)と。しかし、自分自身のその基盤を意識しないで、生きていくのなら、それも問題になるであろう。なぜなら、人間は霊に満ちているので、生があるとなるからである。

さて、もし後半の「従う」は、とりわけガラテヤ書 5 章 16 節の περιπατέω (歩む) と同義語であれば<sup>(23)</sup>、この 25 節は前述の新約聖書翻訳委員会訳の註にあったように余計な発言にすぎないということになるが、この動詞の意味や使い方を再考察すれば、問題点が明らかになる。

### 3 この動詞を見よ

ギリシア語新約聖書釈義事典において *στοιχέω* (stoicheō) という動詞は

- (20) 上記の邦訳を参照。他言語訳においてしばしば異なる表現が使われている。たとえば：“If, then, we live in the Spirit — and we do — let us carry out our daily lives under the guidance of the Spirit.” J. L. Martyn, *Galatians*, (The Anchor Bible; 33 A), Doubleday 1997, 541 頁。
- (21) G. Delling, Art. *στοιχέω κτλ*, *ThWNT* VII (1964) 666–687, 667 頁を参照。
- (22) それは洗礼を受けることによって信徒にもたらされた現実の確認か、それとも人間の生の基盤そのものの確認かは、議論の余地があるが、佐竹氏の『『生きている』という表現もおそらく洗礼用語であろう』というの行き過ぎであろう(上掲書, 549 頁, 注 4)。
- (23) 山内, 上掲書, 342 頁を参照。

「一つの秩序の中に存在する・正しい生活をする・踏む・従う・進む・前進する」のように説明されているが<sup>(24)</sup>、新約聖書に5回しか出てこない<sup>(25)</sup>、この動詞の意味は分かり難い。元来は軍事的な用語であり、「各兵士がしっかりと『その序列 (στοῖχος) の中に留まる』<sup>(26)</sup>」という意味であった。その使い方、またはヘレニズム哲学者と古典ギリシア・ヘレニズムとの使い方が詳しく紹介されたので<sup>(27)</sup>、改めて紹介する必要はない。その上、新約聖書も従来の語法に従っているという、すでに ThWNT<sup>(28)</sup>において指摘されたことが、新たに EWNT<sup>(29)</sup>においても強調されている。隊列の場合は、それはその隊列に並ぶ、または一致して行動するという意味であるが、ガラテヤ書5章25節にある霊の場合は、それはこの霊と共にあるという意味になるのであろう。つまり25節は次のように訳せる。

「もし、私たちが霊に生かされているのなら、霊と共にあろうではないか。」

軍事的な例は各兵士が将校に監督され、制限されていることを連想させるかも知れないが、それは行き過ぎであろう。序列の中に留まるか否かは各兵士に任されているからである。霊を同様に解釈するのは行き過ぎであろう<sup>(30)</sup>。霊と共にあるということはもっと自由なことである。この新しい“事態”がもた

(24) 『ギリシア語新約聖書釈義事典 III』 (=EWNT) 荒井献 (監修), 教文館, 1995年, 318頁。

(25) 使徒言行録21章24節のほか, パウロ文書のローマ書4章12節, ガラテヤ書5章25節と6章16節, フィリピ書3章16節。

(26) 『ギリシア語新約聖書釈義事典 III』, 318頁。

(27) Delling, 上掲書を参照。

(28) 同上書, 668頁。

(29) 上掲書, 318頁。

(30) 原口氏は以下の通りに解釈する。「στοιχέω (従う) という言葉は、一定の規範に従うことを意味する (中略)。『霊によって生きている』ことは、宗教的な熱狂を生むのではなく、霊に指し示すところから従って歩む倫理的な生き方を生まなければならない。」(原口尚章『ガラテヤ人への手紙』(現代新約注解全書・別巻), 新教出版社, 2004年, 220頁)。

らす自由について<sup>(31)</sup>考えてみよう。

#### 4 「福音の言語」・「義認」・「従う」をめぐる命題

ここで、義認 (Rechtfertigung) を出発点に「福音の言語 (Die Sprache des Evangeliums)」と「従う」ことについて、幾つかの命題となり得るものを紹介したい。最初の命題は大前提であり、命題第 2～5 項は、据えられている新しい基盤とその上に生きる人間についてであり、命題第 6～8 項は、人間の“行動”についてである。

- 1 義認は、<sup>ソラ グラティア</sup> sola gratia (恩寵のみ) による出来事であり、私たちが授かる賜物である<sup>(32)</sup>。
- 2 義認は賜物であるがゆえに、私たちが居合わせることを必要とする。なぜなら、この出来事は、たとえば被告人の不在中でも行われる恩赦には還元され得ないようなものだからである。
  - 2.1 しかし居合わせることを、私たちに課される条件として解釈することは拒絶すべきである。それは、<sup>ソラ グラティア</sup> sola gratia という考えに矛盾するからではなく、人間の置かれている状況が誤解されることになるからである。
    - 2.1.1 条件としての解釈は、人間が神の前に進むか否かを人間に委ねられていることとして捉えようとしているので、人間の置かれている状況を誤解する。

(31) 「キリストの出来事によって信徒に全く新しい事態がもたらされた」と佐竹氏はガラ 5:24 の内容をまとめた (上掲書, 544 頁)。

(32) パウロによると「信仰のある者」は義人・義しい者 (ὁ δίκαιος という語は, LXX [ギリシア語訳旧約聖書] のハバ 2:4 を引用するロマ 1:17 とガラ 3:11 の二箇所しか使われていない) ではなく、神によって義とされた人 (ὁ δικαιοθεός) である (ロマ 3:26 ; 5:1 を参照)。



2. 1. 2 なお、人間が置かれている状況を見無視し、客観的な立場から世界全体を見渡すことによって、確定した判断に至ることが可能だと考えるのも誤解である。なぜなら、そういう客観的な立場は存在しないからである<sup>(33)</sup>。
2. 1. 3 そもそも信仰や人間のさまざまな制限を見無視し、世界全体を見渡し、それによって信仰の真偽が明らかになり、やむを得ず信じる必要があるという結論に至ることは不可能である。
- 3 私たちが神の前に進むことは、強要できない。
3. 1 これが強要されていないということは福音の言葉が明らかにする。なぜなら、私たちの興味を喚起しようとするその言葉は拒絶されることを甘受するからである<sup>(34)</sup>。
3. 1. 1 脅迫やいわゆる決定的な証拠や論拠などによって強制を加えようとする言葉は、拒否され、聞き流されるであろう。
3. 2 そのような弱い言葉は完全に人間に方向づけられている。それに対して、惑わそうとする言葉は、単に自分の主張のみを優先し、人間を服従させようとするのである。
3. 2. 1 このように人間に方向づけられ、人間の興味を喚起しようとする言葉が必要とする態度は信仰、あるいは信頼である<sup>(35)</sup>。
3. 2. 2 しかし、この態度は人間に課される条件ではない。つまり、

(33) W. Weischedel はそれと異なって、信仰なき哲学的神学の正当性を主張する。Weischedel の著書 (*Der Gott der Philosophen* 『哲学者の神』: *Grundlegung einer Philosophischen Theologie im Zeitalter des Nihilismus* 『ニヒリズムの時代における哲学的神学の基礎』, 2 巻, [dtv 4322], München: dtv 1979) を参照。

(34) ルカ 18:17 を参照。

(35) 「ゆゑに信仰はあれこれのしるしによつてキリストにおいてわれらに約束された神のあはれみに信頼すること以外の何ものでもない」, メランヒトン (Philipp Melancthon), 『神學總論 ロキ・コム・ネス, Loci Communes, 1521』 (藤田孫太郎譯), 新教出版社, 1949 年, 154 頁。

信頼することは私たちが自発的にできることではなく、むしろ神は自分自身の到来を通してあらかじめ人間に信頼を寄せたことによって初めて可能になるのである。

3.2.3 人間が信頼できるのは、神にあらかじめ信頼されていることに基づき、神との関係が成立するところに、初めて人間の信頼が生じる。言い換えれば、人間に語りかける神が、その語りかけによって、私たちの信頼が成長できる場を創りだしている。

3.2.4 神の語りかけ（啓示）は、<sup>コトバ</sup>聖書と創造によって行われる（マコ 4:30～32 を参照）。

4 私たちの居合わせが前提であり、居合わせることを拒否することは選択外であるにもかかわらず、私たちが積極的に参与することは強要され得ない。ゆえに、この出来事（つまり、義認されること）は失敗に晒されかねない。

4.1 啓示があり、神自身によって全ては整えられた。残るのは、私たちが積極的に参与することだけである。

4.2 神は私たちを受け入れようとしているのだが、私たちは拒否することができる。なぜなら、人間は選択できる者（創造物）だからである（マタ 11:16～17 を参照）。

5 このような出来事は、新しい認識の獲得ではなく、自分が置かれている状況かつ自分自身に関する新たな発見である。

5.1 福音書の説話に同意することは「信仰ではなく、それは一つの悟性の意見すなはち神の言<sup>コトバ</sup>に関する人間の不確かな變り易い動搖する思想<sup>(36)</sup>」に過ぎない。不確実な話は人の心を動搖させず、「自然は神

(36) メランヒトン，同上書，152頁。

の言に同意しない、また神の言と何の関係もない<sup>コトバ</sup>(37)」。それでも同意する人があるのなら、それは身を守るためである<sup>コトバ</sup>(38)。

5. 1. 1 「神の固有のわざは私たちの内にある罪の認識と罪に対する憎悪である<sup>(39)</sup>」が、その認識は事後、すなわち、義認されてからしか摂取することができない。

5. 2 神が私たちの積極的な参与に頼るということは、法を遵守する正義に満ちた厳格な裁判官があらゆる権限を放棄し、慈しみ深い父になったことを意味する<sup>(40)</sup>。

6 この発見は、新しい土台が据えられている（1 コリ 3:11 を参照）ことに気付かせるので、神を在天の父と呼ぶことを可能にする。

6. 1 この土台の上に生きるということは、もはや自分を抛り所にしないで、行動することであり、自由である（ガラ 5:1 と 13 を参照）<sup>(41)</sup>。

6. 1. 1 自由を経験させる出来事として、これはキリストの出来事を離れて不可能である<sup>(42)</sup>。

(37) メランヒトン、同上書、153 頁。

(38) 「自然はただ犯した罪について自己愛と懲罰への恐怖から苦痛を感ずるにすぎない。」メランヒトン、同上書、62 頁。

(39) メランヒトン、同上書、62 頁。ロマ 3:20 を参照。

(40) 「神のあはれみの約束を見よ、あなたは神の約束を信じて、審判者を持つてはならない、あなたの心の中に天の父を持つことを疑うてはならない。」メランヒトン、同上書、156 頁。

(41) G. Ebeling, *Die Wahrheit des Evangeliums: Eine Lesehilfe zum Galaterbrief* 『福音の真実—ガラテヤ書を読む人のために』, Tübingen: Mohr 1981 をも参照。特に、346~350 頁 (Die konkrete Freiheit 『具体的な自由』)。

(42) “Paulus spricht . . . von einer Erfahrung mit dem Christus (パウロは…キリストを経験すると言う)” (H. Weder, *Die Normativität der Freiheit* 『自由の規範性』: Eine Überlegung zu Gal 5, 1.13–25 『ガラ 5:1, 13–25 についての考察』, S. 129–145, in: *Paulus, Apostel Jesu Christi* (FS Günter Klein), M. Trowitzsch (Hrsg.) Tübingen: Mohr Siebeck 1998, 131 頁)。さらに、H. Weder, *Das Kreuz bei Paulus* 『パウロにおける十字架』: Ein Versuch, über den Geschichtsbezug des christlichen Glaubens nachzudenken 『キリスト教の信仰は如何に歴史と結ばれているかについての考察』, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 1981 を参照。

6. 1. 2 キリストの出来事によって自由になった者は、据えられている土台の上にいるので、この土台を無視することは、再び自分を唯一の確かな拠り所にするのであり、キリストを無視することである。
6. 1. 3 得た自由はキリストにおける自由なので、キリストを無視することは、自分が「新しく創造された者 (*καινή κτίσις*)」(ガラ 6:15 と 2 コリ 5:17 を参照) になったことを誤解することである。
6. 2 人間は、神に義とされることによってはや自分自身の行動に自信を持つ必要がない確信を得るのである<sup>(43)</sup>。
6. 2. 1 しかし、「私にはすべてのことが許されている」(1 コリ 6:12) にも拘らず、責任を取れる範囲内で行動しないと、その土台を台無しにすることになる。
6. 2. 2 自分の責任を認めるというのは、束縛されることへの服従ではなく、自分が「キリストの体」に連なる信者の一人であることを認めることである<sup>(44)</sup>。
- 7 この発見は日常生活における経験を一義的なものにしないのだが、日常の多様性の中で、一義的で、一貫した生を可能にする<sup>(45)</sup>。

(43) “Die Rechtfertigung durch Gott gibt die Sicherheit, sich seiner Moral nicht sicher sein zu müssen.” (D. Havemann, *Evangelische Polemik: Nietzsches Paulusdeutung* 『福音的論争—ニーチェのパウロ解釈』, S. 175–186, in: *Nietzsche-Studien, Internationales Jahrbuch für die Nietzsche-Forschung*, Band 30, 2001), 183 頁を参照。

(44) “Life in the Spirit carries with it unavoidable responsibilities (聖霊における生は不可避な責務を伴う).” (D. Guthrie, *Galatians*, [New Century Bible commentary], Reprint, Grand Rapids (Mich): Eerdmans 1981, 141 頁) をも参照。

(45) “Nicht die Lebenserfahrung macht den Glauben eindeutig, sondern der Glaube lehrt, die Lebenserfahrung in ihrer Vieldeutigkeit zu durchschauen und unter den Bedingungen dieser Vieldeutigkeit dennoch eindeutig zu leben.” 「日常生活においての諸経験が信仰を明確に(一義的に)するのではなく、むしろ信仰が諸経験の多様性(多義性)を見抜くことを可能にしており、これらの多様性(多義性) ↗

7.1 日常生活, また諸経験を一義的なものにする試みは必ず失敗に終わり, そういう試みは新たな墮落である。

7.2 霊は新しい律法ではなく, 一貫した生の基盤であるがゆえに, その規範でもある。

8 一貫した生の確かなる拠り所は聖霊である。

## 5 結び — この霊を見よ

「君たちはまだ君たち自身をさがし求めなかった。さがし求めぬうちにわたしを見いだした。信徒はいつまでもそうなのだ。だから, 信ずるというのはつまらないことだ<sup>(46)</sup>」とニーチェは上述の序言にも宣言し, 信徒の素朴な態度を批判した。ニーチェが指摘するのは, 深刻な問題に違いない。しかし, 義とされるという神の業は, 人間のアイデンティティーに関する問への明確な答え<sup>(47)</sup>でもあるので, もはや“本来のおのれ”や自分自身をさがし求める必要性がないのである。ところが, この明確な答えを鵜呑みにし, 対応しないままにしているのは極めて危ういことである。「君たちの尊敬がくつがえる日が来ないとはかぎらないのだ」とニーチェは指摘するように, 神の答えに取り組み, それを受け入れようとしない限り, 簡単に取り損なうことになるかも知れない<sup>(48)</sup>。義とされたことは, 人間の信仰生活の出発点であり, 人間の反応を伴う。組織神学者であるダルフェルト氏はこの事柄についてこう言うのである。

「に耐え, 明確に生きることを許すのである。」 I. U. Dalferth, *Glaube und Lebenserfahrung* 『信仰と生活経験』, 86-98 頁, in: *Gedeutete Gegenwart: zur Wahrnehmung Gottes in den Erfahrungen der Zeit*, Tübingen: Mohr Siebeck, 1997, 91 頁。

(46) ニーチェ, 上掲書, 13 頁。

(47) Weder, *Normativität*, 131 頁, 注 8 を参照。

(48) キリストに関して, 取り組まないことはキリストを死んだ者にしておくことであるとも言えるだろう (J. Ringleben, *Wort und Rechtfertigungsglaube* 『言葉と義認信仰』: *Zur Horizontauffächerung einer Worttheologie in Luthers Disputation »De fide«*, *ZThK* 92 (1995) 28-53, 41 頁, 注 86 を参照)。

「神の人間に対する全ての道の終着点は信仰である。そこからようやく人間の道が始まる<sup>(49)</sup>」と。

「人間の道」は世界における道なので、世界を離れ、遁世するのは間違った反応である。この「人間の道」は意見や立場の異なる人々との議論に取り組むことを含むのである。キリスト教に改宗させるためではなく、キリスト教の信仰そのものがそれを必要とするからである。

25節前半の霊に生かされているとういことは、唯一神の業であるのに対して、25節後半の行動や態度は完全に人間に任され、人間の反応である。それは自分を正当化するような道ではないのは言うまでもない。

この反応は教師を必要としないのだが、霊を見つめながらなすべき反応である。パウロはただその仲介者 (mediator) になり<sup>(50)</sup>、この勧誘法 (Adhortativ) を通して霊の働きに注目させようとしているのである。つまり、自分は何をなすべきかという人の内側に生まれてくる問いより、自分は何であるか、あるいは自分は何になったかという人の内側に生まれてくる問いの方が大切だということであろう。これが信仰生活の原点である。

——文学部准教授——

---

(49) Dalferth, 上掲書, 93頁: Der Glaube “ist das Ende aller Wege Gottes zu uns. Unsere Wege können damit überhaupt erst beginnen.”

(50) “Paul himself becomes one of the most important transmitters of the tradition of the church and to the church. As an apostle he stands as a mediator between Christ (God) and his Gentile Christian churches and, beyond them, the Gentile world as a whole.” (H. D. Betz, *Galatians: A Commentary on Paul's Letter to the Churches in Galatia*, Philadelphia: Fortress Press 1979, 65頁)。